



Title	『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ：主人公の「祖先の系譜」について
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	独語独文学研究年報, 42, 1-23
Issue Date	2016-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61102
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	42_01_terada.pdf



[Instructions for use](#)

『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ
—主人公の「祖先の系譜」について—

寺田龍男

1. はじめに

中世ドイツの英雄叙事詩(Heldenepik)の中では『ニーベルンゲンの歌』(Nibelungenlied)がもっともよく知られている。1200年頃の成立とみられるこの作品は多数の写本が書かれており、当時人気が高かったことがうかがえる。しかし現在までに確認された写本の数を成立年代別に見ると、13世紀に14、14世紀に10、15世紀には9と、傾向としては漸減である。16世紀になるとその初頭に1点(「アンブラス英雄本」Ambraser Heldenbuch)が書かれたのみである。『ニーベルンゲンの歌』はこの写本dを最後に書写されず、印刷は一度もされなかった。

これに対して同じ英雄叙事詩でもディートリヒ叙事詩(Dietrichepik)は、日本ではほとんど知られていないものの、13世紀以降数多くの作品が作られている。とくに14世紀から17世紀にかけて写本が多数制作され、15世紀後半以降は印刷本でも多くの作品が刊行された。『ニーベルンゲンの歌』と比べると作品の成立は遅いが、その後の書記伝承に独自性がある。『ニーベルンゲンの歌』や宮廷物語に関心を示さなかった印刷本の製作者とその顧客が¹、ディートリヒ叙事詩の諸作品には強く惹かれていたのである。このジャンルが中世ドイツ文学全体の中で占めた位置は再認識されるべきだろう。

そのディートリヒ叙事詩では、いずれの作品でも、実在した東ゴート国の王テオドリクス(453?-526年)を祖型とするディートリヒ・フォン・ベルン(Dietrich von Bern)の活躍が描かれる。このジャンルはさらに「ディートリヒの歴史叙事詩」(historische Dietrichepik:以下「歴史叙事詩」と略す)と「ディートリヒの冒険叙事詩」(aventiurehafte Dietrichepik:以下「冒険叙事詩」²)という二つの下位カテゴリーに分けられる。歴史叙事詩には『ディートリヒの敗走』³(Dietrichs Flucht:1275-1300年の成立)、『ラヴェン

¹ アルトゥス(アーサー)王系の物語もドイツ語圏ではほとんど印刷されていない。寺田龍男「火を吐くディートリヒ—ディートリヒ・フォン・ベルン研究序説—」『ノルデン』29(1992)1-23頁を参照されたい。

² ここでaventiurehaftという概念を「冒険」と訳したのは、アルトゥス王物語で用いられるaventiureとはニュアンスが異なるからである。古典的宮廷詩人のハルトマン・フォン・アウエやヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの作品の主人公とは異なり、冒険叙事詩に登場する主人公は、さまざまな困難を克服して騎士道の理想を体現するという道を歩むのではない。

³ Dietrichs Fluchtを『ディートリヒの「敗走」』と訳した点について補足する。フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲンは1825年にその校訂版で『ディートリヒの祖先とフン人へのFlucht』(Dietrichs Ahnen und Flucht zu den Heunen)と題をつけた:Dietrichs Ahnen und Flucht zu den Heunen. In: Der Helden Buch in der Ursprache. Hrsg. von Friedrich Heinrich von der Hagen/Alois Primisser. Bd. II.

ナの戦い』(Rabenschlacht : 1275–1300 年)、『アルプハルトの死』(Alpharts Tod : 13 世紀後半、1275–1300 年の成立か) および『ディートリヒとヴェネツラーン』(Dietrich und Wenezlan : 断片写本 1250 年頃) の 4 作品が属する⁴。

「歴史(的)」と称される所以は、いずれの作品も主人公ディートリヒのイタリア北部の支配権をめぐる戦いをテーマとすることと、フン人のアッティラ (Attila : 作品内ではエッツェル Etzel : ?–453 年) が登場することにある。作品の筋立て自体はたしかに、とても史実に基づくとはいえない。そのため「歴史的」という用語を用いることへの批判はある⁵。だが東ゴート人の王となったテオドリクスはラヴェンナを中心に北イタリアを支配していた。アッティラもテオドリクスと活躍していた時期が重ならないとはいえ、実在した人物である。このように核心中の核のみに基づくのではあるが、「歴史的」という形容詞はそのかぎりにおいて必ずしも見当違いと言い切ることはできず、研究者の間で定着して今日に至っている⁶。

Berlin: Reimer 1825 (Deutsche Gedichte des Mittelalters 2). しかし研究史においてはフォン・デア・ハーゲンによる命名自体が批判されている (Elisabeth Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik. Untersuchungen zu ›Dietrichs Flucht‹, ›Rabenschlacht‹ und ›Alpharts Tod‹. Berlin/New York: de Gruyter 2010 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 5), S. 7; Florian Kragl: Heldenzeit. Interpretationen zur Dietrichepik des 13. bis 16. Jahrhunderts. Heidelberg: Winter 2013 (Studien zur historischen Poetik 12), S. 54). Flucht の訳語を「敗走」と仮訳したのは、主人公がエルムリヒ王に追放されてエッツェルの許に避難することと、局部的戦闘においては常に勝利しても大局では敗れるからである。本来であれば、作品内で *buoch von Bern* と 2 度 (註 4: Dietrichs Flucht, V. 10080, 10106) 記されており、また写本 W の冒頭に「ベルンのディートリヒの書」(Dietreiches puoch von pern) という表題が付されているので、『ベルンの書』(Buch von Bern) 等の方が相応しい。しかし結局略称の Dietrichs Flucht が普及し、今日に至っている。Flucht の訳語として「敗走」にこだわるものではないが、原表現自体に疑問符がつけられているため、ここでその訳語を議論することは避ける。

⁴ 『ディートリヒの敗走』・『ラヴェンナの戦い』・『アルプハルトの死』からの引用は以下の校訂版による。Dietrichs Flucht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Gertrud Beck. Tübingen: Niemeyer 2003 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 1); Rabenschlacht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2005 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 2); Alpharts Tod, Dietrich und Wenezlan. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Viola Meyer. Tübingen: Niemeyer 2007 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 3). 各作品の成立年代は Elisabeth Lienert: *Mittelhochdeutsche Heldenepik. Eine Einführung*. Berlin: Schmidt 2015 (Grundlagen der Germanistik 58), S. 101, 110, 114 による。

⁵ Lienert: *Mittelhochdeutsche Heldenepik* (註 4), S. 101.

⁶ 英雄叙事詩が前代史 (Vorzeitkunde) として構想および受容されてきたかという議論は以前からあり、近年も再び活発化した。Vgl. Cordula Kropik: *Reflexionen des Geschichtlichen. Zur literarischen Konstituierung mittelhochdeutscher Heldenepik*. Heidelberg: Winter 2008; Florian Kragl: *Die Geschichtlichkeit der Heldendichtung*. Wien: Fassbaender 2010 (Philologica Germanica 32); ders.: *Heldenzeit* (註 3). 書評等で時に激しい議論が展開されているが、これらの研究が論証の過程で多くの知見をもたらしていることは評価されるべきである。しかしそうした構想、すなわち伝承が真実だ

歴史叙事詩の内容は、主人公ディートリヒがエッツェルの宮廷に（最終的に）寄寓する前の段階を描くものである。したがって『ニーベルングンの歌』のいわば前史をなしており、『ディートリヒの敗走』・『ラヴェンナの戦い』・『アルプハルトの死』にはこの作品と共通する悲劇的な通奏低音が感じられる。これに対して冒険叙事詩の諸作品は、ディートリヒを主人公とはするものの、内容的にはアルトゥス（Artus）王物語などの宮廷物語や英雄叙事詩に先行する吟遊詩人の叙事詩等の文芸ジャンルとの間で共通性が大きい。主人公（たち）の戦いは侏儒・巨人・竜・怪物のような超自然的な存在や異教徒が主な相手であり、時には主人公の恋愛（ミンネ）や結婚といった要素もテーマ化されている。歴史叙事詩の諸作品と比べると、今日的な意味での娯楽性が明らかに強い。

小稿の考察対象の一つである『ディートリヒの敗走』（全体で 10129 行）の冒頭 1–2521 行では、主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの祖先の系譜（Genealogie）がディートリヒの父ディートマルまで語られる⁷。この系譜はミヒャエル・クルシュマンが指摘したように完全な虚構である⁸。それにもかかわらず『ディートリヒの敗走』を史書として読んだ人々が存在する。もう一つの考察対象とするハインリヒ・フォン・ミュンヘン（Heinrich von München）の『世界年代記』（Weltchronik: 1370–80 年頃）の 2 つの写本に、ほぼ同じ内容の系譜が記載されているのである。短く切り詰めた形態ではあるものの、それらは『ディートリヒの敗走』に依拠したとの見解で研究者は一致している⁹。この『世界年代記』は『旧約聖書』の「創世記」から 13 世紀の皇帝フリードリヒ 2 世までの時代を記述する。現在までに 19 の写本といくつかの断片写本が残されているが、完本は全体で 56000 行から 100000 行におよぶ。しかも写本間で本文の異同が非常に大きいことで知られている。

という思いこみが作者にあったことを示す証拠が作品の内部やその周辺世界で確認できないのであれば、議論は空転の恐れがある。実証的な研究の展開を期待したい。Vgl. Elisabeth Lienert: Rezension zu Kragl, Die Geschichtlichkeit der Heldendichtung (註 6). In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 134 (2012). S. 286–289, hier S. 286.

⁷ (作品梗概) 冒頭の系譜の末尾で父王が没した後、叔父のエルムリヒがディートリヒを罠にかけ滅ぼそうとする。窮地を出したディートリヒはその後の戦いで勝利する。しかし軍師ヒルデブラントらが捕らえられる。それら 13 名を救うため、ディートリヒは領国の支配権を放棄し、フン人の王エッツェルの許に亡命する。支援を受けてディートリヒはエルムリヒを破り、ラヴェンナを包囲する。しかしかつての臣下ヴィテゲの裏切りにより、勝利は無に帰する。エッツェルが再度兵を提供し、再びエルムリヒを破るものの、大局では勝利に至らず、結局主人公はエッツェルの許に戻る。

⁸ Michael Curschmann: Zu Struktur und Thematik des Buchs von Bern. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 98 (1976). S. 357–383, hier S. 358.

⁹ Vgl. Gisela Kornrumpf: Heldenepik und Historie im 14. Jahrhundert (註 18), S. 103; Joachim Heinzle: Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik. Berlin/New York: de Gruyter 1999, S. 61–63; Dietrich-Testimonien des 6. bis 16. Jahrhunderts. Hrsg. von Elisabeth Lienert unter Mitarbeit von Esther Vollmer-Eicken/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2008 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 4), S. 159–161; Lienert: Die »historische« Dietrichepik (註 3), S. 88f.

ここでひとつの疑問が生じる。まったくの虚構でしかないのであれば、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンはいかなる意識によってこの系譜を自分の『世界年代記』にとり入れたのだろうか。これが現在、筆者が解決を目標とする主要な課題である。小稿ではまずその考察の基礎となるデータを示し、若干の分析を試みる。具体的には両作品の本文で一致する表現を比較して通説を再検討する。さらにそれぞれの作品が有する特徴に光を当て、共通点と相違点を明らかにする。その上でハインリヒ・フォン・ミュンヘンの意図に関する仮説を提示する。

2. 『ディートリヒの敗走』におけるディートリヒ・フォン・ベルンの「系譜」

『ディートリヒの敗走』に描かれた系譜は、作品全体の約4分の1を占める長大なものである。次章でとりあげるハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』との共通性が高い記述を原文とともに引用する。この可視化作業により、先行研究では示されることのない具体的な対照を可能にする。また小稿は作者の意図を推測することを目標とするので、作者の投影である語り手にも注目し、『ディートリヒの敗走』の語り手の姿勢をハインリヒ・フォン・ミュンヘンのそれと比較する。そこでとくに重要と思われる表現は、これも原文とともに引用する。なお以下につけた番号は原文にはなく、筆者が便宜的に付したものである。また『世界年代記』の記述とおおむね一致する場合はその旨を付記する。

1. 初代の王ディートヴァルト Dietwart (1–1897行：計1897行)

ローマの王ディートヴァルトは素性が優れ、誠実で名誉の誉れ高く、世の人々の賞賛を集める人物だった。語り手は「私たちが賢者の語りを聞きましてところでは、王は清く輝かしい日々を送り、非の打ちどころなど一点もなかった。」(25–27行: *Er lebt in rainen pluenden tagen, / als wir die weysen horen sagen, / so gar on alle schannde.*)と述べる(→『世界年代記』81–83行)。武勇にもすぐれ、アルトゥス王にも匹敵する。王は家臣の勧めにより30歳で騎士となる。そして聖杯ですら得られそうな知力と武力に優れた家臣を従える。こうしてヴェステンメア(Westenmer)の王ラディネル(Ladiner)の娘ミンネ(Minne)を娶る旅に出る。火を吐く竜と戦うなどの困難を乗り越えて無事に帰国したディートヴァルトは、妃との間に44人の子をもうける。しかし1人ズイクヘアのみが残り、ディートヴァルトは400年の生を全うする。

2. 2代目ズイクヘア Sigher (1898–2071行：計174行)

ズイクヘアも賢者の教えに反せぬ名君となる。語り手はその徳を讃え、すぐに嫁取譚に移行する。「では手短にお話して彼に妻を娶らせましょう。」(1940–41行: *Nu lassen wir in nemen ein weib / mit einem kurtzen maere.*) (→『世界年代記』130–131行)。成人すると家臣の勧めでノルマンディ国へ旅に出て、主君パルス(Pallus)の娘アメルガルト

(Amergalt¹⁰) を平和裡に娶る。めでたく結ばれたふたりは 31 人の子宝に恵まれるが、男児と女児それぞれ 1 人を残してみな早世する。男の子はオットニート (Ottnit)¹¹、女の子はズイクリント (Siglint) と命名された。ズイクリントはニーダーラントの王ズイクムントと結婚し、ゼイフリト (Seyfrid) をもうける。しかしやがてトロンゲンのハゲン (Hagen von Trongen) に泉のほとりで暗殺され、それがもとで大殺戮が起きる。語り手は「私はこの方の死がとても心に痛む。」(2057 行: *Vil sere rewet er mich.*) と述べる (→『世界年代記』164 行)。しかし話がそれたため語り手は「この話は止め、再び本題を始めましょう」(2058–59 行: *Nu lassen wir die maere stan / und heben hie wider an:*) と告げる (→『世界年代記』165–166 行)。ズイクヘア王も天命により亡くなる。(ズイクヘアも 400 歳になったことが 2090 行で示される。)

3. 3 代目オットニート Ottnit (2072–2255 行 : 計 184 行)

父王の国を継いだオットニートも名誉ある生を送った。彼も家臣の勧めを受けて海の遙か彼方の国の王ゴディアン (Godian) の娘リープガルト (Liebgart) を娶る決心をする。異教徒の王は娘の求婚者を認めないので、オットニートは最初から攻撃する。焼き打ちで荒唐させると、父王は渋々娘を与える。しかし復讐の機会を狙って竜を差し向け、オットニートは殺されてしまう。(受容者にはこのエピソードが既知であるという前提で語りが進む。) その妻は嘆き、夫を殺した竜を退治した男と再婚すると宣言する。

4. 4 代目ヴォルフディートリヒ Wolfdietrich (2256–2319 行 : 計 64 行)

ギリシャの貴人ヴォルフディートリヒがローマにやって来る。彼は竜を倒し、リープガルトの夫となり、その勇猛心で名誉を得る。ヴォルフディートリヒは 503 歳で亡くなるまでに 56 人の子をもうけた。1 人だけ成人した子はフークディートリヒであった。

5. 5 代目フークディートリヒ Hugdietrich (2320–2377 行 : 計 58 行)

フークディートリヒも徳操高く、語り手は絶賛する。成人するとフランク国 (フランス) の王女ズィゲミンネ (Sigeminne) を得たが、そこには苦難があった (2364–65 行: *waz arbeit er umb si gewan, / e er si ze wibe nam.*) という (→『世界年代記』255–256 行)。フークディートリヒは妃とともに 450 年生きた。しかし子は男児 1 人だけだった。

6. 6 代目アメルンク Amelunc (2378–2448 行 : 計 71 行)

フークディートリヒ亡き後、その王子アメルンクがローマとフランクの国を相続した。そ

¹⁰ 作品の 1947 行では Amergalt と記されているのに対し、1988 行では綴りが Amelgart に変わっている。後者の表記は次章で見る『世界年代記』136 行のそれと一致する。

¹¹ 通常この英雄はオルトニート (Ortnit) と称し、研究者もこの表記を用いるのだが、小稿では原表現による。

の誠実さ (triuwe) と変わることなき心 (staete) で、美德の始まりと人はいった。娶った妃はカールの国 (フランス Kerling) の人だった。アメルンクも徳の高い王で、3人の王子をもうける。長男がディートヘア (Diether)、次男がエルムリヒ (Ernrich)、三男がディートマール (Dietmar) と名づけられた。王は天寿を全うする際、家臣の進言を容れて遺産を分割相続させた。なお作品全体で悪の権化として描かれるエルムリヒが、ここで初めてその性格を規定される。作者は「神よ、私はこの男 (エルムリヒ) が一日たりとも生きたことを嘆きます。なぜならおよそ母親から生まれた中でもっとも不誠実な男ですから。この男のせいで数多くの命が失われた。」(2415–19行: her got, nu chlag ich, / daz er ie einen tach genas, / wand er der ungetriwiste was, / der ie von mueter wart geporn. / Von im wart manich man verlorn.) と描写する (→『世界年代記』282–286行)。

7. 7代目ディートマール Dietmar (2449–2521行: 計73行)

新王たちは領地・財・民を支配し、それぞれ妃を娶り子ももうける。しかしどの妃も名前が挙げられない。またその子たちはやがてみな苦難を味わう。ディートヘアの3人の息子 (ハルルンク Harlung と総称される) は、その父亡きあと叔父のエルムリヒにより吊るし首にされる。エルムリヒ自身の息子フリデリヒ (Friderich) も父親から見殺しにされてしまう。神に力を与えられたディートマール (2498行: Got fuogt im guotes riche chraft.) は名誉を守り、領国を平和裡に治めて340年の天寿を全うしたが、その長男で作品の主人公でもあるディートリヒと弟ディートヘアは、エルムリヒにより追放される。そのエルムリヒの性格がここで初めて明示される。「エルムリヒ王はフリデリヒという息子を得たが、のちにこの子をヴィルツ人¹²の国に送ったことで、その不誠実さがわかった。さあお聞きあれ、この男は自分の愛すべき子への誠実さを切り捨てた。いろいろな話を見ても、かつてこれほど不誠実な人間が生まれたことはない (...)。」(2460–69行: Ez gewan der kunich Ernrich / einen sun, der hiez Friderich, / den er sit versande / hin ze der Wilzen lande, / dar an man sin untriwe sach / (nu seht!), da er sin triwe brach / an sinem liewen kinde. / An manigem mæer ich daz vinde, / daz bei nimannes tagen / ungetriwer lip nie wart getragen. (→『世界年代記』295–304行)。

(関連) エルムリヒのフレデリヒに対する姿勢が明示される箇所を引用する。

¹² 原表現 Wilzen。8世紀から10世紀にかけてオーデル川とエルベ川の間に住していた西スラブ系の人たちの総称。カール大帝の伝記でもヴィルジ人 (Wilzi) またはヴェラタビ人 (Welatabi) として言及される。エインハルドゥス『カロルス大帝伝』(エインハルドゥス / ノトケルス『カロルス大帝伝』國原吉之助 (訳) 東京: 筑摩書房 1988年 1–54頁) 21, 25頁および Einhard: Vita Karoli Magni. Das Leben Karls des Großen. Lateinisch/Deutsch. Übersetzung, Nachwort und Anmerkungen von Evelyn Scherabon Firchow. Stuttgart: Reclam 2014 (RUB 1996), S. 26, 32を参照。ヴィルジ人集団は10世紀末に解体したが、『カロルス大帝伝』では大帝により平定されたものの勇猛な人々と認識されていた。『ディートリヒの敗走』が成立した時点ではその記憶が残っていたために言及されたのであろう。

フリデリヒと配下の 1800 の兵がディートリヒ側に捕らえられる。しかし和議を申し出たヒルデブランドに父親のエルムリヒは言い放つ。「息子のフリデリヒなど放っておくぞ、おまえたちを生かしておくくらいなら。おまえたちが望むものはこの程度でしかないのだ。私と息子の縁など切れている。」(3853–58 行 : *Minen sun Friderich / ich e selbe verstieze, / e ich iuch leben lieze. / Daz ist allez, als ir welt. / Diu sippe, die ist ouz gezelt / zwischen mir und minem neven.*) エルムリヒは自分の息子の命を顧みない人非人であるという、負のイメージを強調する意図があったことはまちがいない。

1 から 7 を概観すると、最初のディートヴァルトに関する語りが突出して長く、その後急減することが目につく。ディートヴァルトのエピソードはいわゆる「嫁取り譚」(*Brautwerbungsgeschichte*) が大きな部分 (783–1874 行) を占める。この構成は次のズイクヘア以降でもほぼ同様である。始祖ディートヴァルトの生きざまがアルトゥス王に 2 度 (105, 131 行) などぞえられるように、いずれの王も絵に描いたような模範的人物であり、敵と戦っては無双の勇士ぶりを示す。それらの王たちがいかなる妃を迎えたかがアメルンクまでは叙述される。またどの王も『旧約聖書』の「創世記」の人物のような長寿を全うする。そして多くは子宝に恵まれるものの、成人する男子は 1 人だけである。それゆえ遺産の相続では問題が生じない。これが始祖ディートヴァルトの部分から繰り返されるパターンである。6 代目アメルンクに至って初めて 3 人の王子 (長男ディートヘア・次男エルムリヒ・三男ディートマール) が長じる。アメルンクが亡くなる際、家臣の進言により 3 兄弟にその遺産を分けて相続させたところで物語の本筋が始まる。したがってそれ以前の系譜の描写は本筋とは直接の関係がない¹³。それゆえなおのこと、この系譜の意義が問われるのである。

作者が系譜で同工異曲の語りを避けたのであれば、これは賢明な判断であろう。なぜな

¹³ ただ歴史叙事詩全体の中で考えると注目すべき点が 2 つある。(1) 主人公と神とのつながり。ディートリヒの父ディートマールには神により力が与えられていたという記述 (2498 行) は、系譜の中で特定の人物と神の結びつきを強調する初めての表現である。『ラヴェンナの戦い』651 節以下では、ディートリヒがいかなる戦いでも身を守れたのは鎧の下に纏った絹の下着に 4 つの聖遺物が縫いこまれていたからだという記述がある。また 618 節でも、激戦で汗をかいて兜をはずした主人公のために神が風を吹かせている。「神が力を与える」「神が風を吹かせる」等は中世の文芸では定型化しており、『ディートリヒの敗走』でも 228 行、1091 行、3182 行、3560 行等で見られる。しかし父王ディートマールから神との結びつきがとくに強調されている点は注目に値する。その兄エルムリヒが神の復讐によりすべての財と命を失うのは (『ディートリヒの敗走』2557–67 行、2867 行)、同じ観念に基づく断罪と判断すべきである。(2) 主人公の祖父アメルンクの妃は出身国のみ示され、名前が出ない。そしてその 3 人の王子ディートヘア・エルムリヒ・ディートマールもそれぞれ妃を娶るものの、出自や名前は一切紹介されない。これはディートリヒの原型であるテオドリクスが正当な嫡男ではない (すなわち王位にはふさわしくない女性から生まれた) と年代記などで繰り返して批判されてきたため、作者が主人公の母親の名を出さないよう配慮した結果と考えられる。

らそこでは、祖先がすぐれた王たちだったことを示せば十分だからである。作者が王の系譜で始めたのは、ディートリヒの「真実」を伝えるためではない。もしそうであれば、ズイクヘア以降の王たちの物語も鮮やかに語っていたはずである。それをしなかったのは、語る材料を持ち合わせていなかったからだと推測する。すなわちこの人物は、『皇帝年代記』のような史書の体裁をもって自分の作品に権威づけをしたかったのである。重要なことは、史書に見られるような王の系譜になぞらえることだけだった。あとになっても同じパターンが用いられ続けたのは、長く語る話種がなかったからであろう。作者自身も長く語る必要性を感じていなかったと想像する。

その帰結として、単調な語りが聴衆に飽きられることを恐れたことも考えられる。それを示す語り手の表明が随所に見られるからである。

Nu lassen wir die mere stan / und heben wider an, V. 127f. (類例 V. 2058f.)

この話はこのくらいにして再び始めましょう、(…)

mit dem maere ich eyle V. 1405 私は話の先を急ぐことにします

Wer es zu horen nicht ze lanng, V. 1700 ご退屈でなければお聞かせしますが、

Nu was wellen wir des mére? V. 1938 さてこれ以上何をお話しましょうか。

Nu lassen wir in nemen ein weib / mit einem kurtzen maere. V. 1941f.

では手短にお話して彼に妻を娶らせましょう。(→『世界年代記』130-131行)

das ist ein lannges maer / den leuten fuarzesagen, / wir suallen das annders gar verdagen, / und nennen wir die poten baide. V. 1963-66

これを人々に語ると長い話になってしまいます。私たちは他の者たちは伏せて二人の使者だけ名前を挙げましょう。(類例 V. 1786-88, 1764-68, 2011-19,)

Wir süllen das märe nicht lanng sagen, / lassen wir es ennde han! V. 1981f.

この話をこれ以上つづけるのはやめて、お終いにしましょう。

(類例 V. 1999f., 2097, 2120, 2235, 2375)

Was taugte der rede mere? V. 2129 この話をこれ以上して何になるでしょう。

最初の例と同じ文はすでに見たズイクヘアのエピソードでも用いられている。しかしこうした表現が頻出するからといっても、作者は短慮な構想で物語に取り組んだのではない。ラテン語の史書においては、すでに古典古代から同様の表現が用いられているからである。したがって作者が伝統的な表現手段を用いたことの証と見ることは十分可能である。口頭伝承の英雄ディートリヒの祖先に関する長大な系譜を描いて見せることで、この人物が今までにない新機軸を打ち出したのは明らかである。またこれもクルシュマンが指摘したことだが、のちの2度の合戦は同じパターンで語りを展開する¹⁴。これを熟慮によると解する

¹⁴ Curschmann (註 8), S. 367-371. クルシュマンが発見した原理は、フーゴ・クーンが『エーレク』について証明した「対応と反復を基調とする構成原理」(doppelter Kursus)と

べきかは判断が分かれるかもしれない¹⁵。たしかにこの系譜ではパターンや表現の繰り返しが多くみられ、現代の読者にはいささか単調な印象を与える。だが作者は世俗の英雄語りや先行する諸作品にはない独自の物語を著わしたのであり、念頭にひとつの構想があったことは認めるべきである。この人物はきわめて強い個性を有していたと判断する。

3. 『世界年代記』におけるディートリヒ・フォン・ベルンの「系譜」

次に『世界年代記』における系譜を見てゆくと、注意しなければならない点がある。順番としては13世紀の末に成立した『ディートリヒの敗走』の系譜が先にあり、これをハインリヒ・フォン・ミュンヘンが14世紀後半に著わした『世界年代記』に取り入れていると述べた。しかしこの「系譜」が記載された写本の年代で見ると、実はハインリヒの年代記の方が古いのである。『世界年代記』の2写本(H8, H15)がいずれも14世紀末に書かれているのに対し、『ディートリヒの敗走』では完本4写本のうち、上述の7代の系譜が完全な形で掲載されているのは15世紀半ばの写本Pと16世紀初頭の写本Aしかないからである¹⁶。こうした事情ゆえに、『ディートリヒの敗走』の校訂者は冒頭の2297行目までを写本Aに、そしてそれ以降では写本Rにそれぞれ依拠したのである。

1. 写本R (13世紀末、作品成立から間もない時期の書写)

2. 写本W (1300–30年頃の成立か)

(この間にハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』が成立し、写本H8とH15も書かれている。)

3. 写本P (1443年から1449年の間に成立)

同じ(または少なくとも近い)性質と考えてよい。(ただしクルシュマン自身はクーンと関連づけていない。) Vgl. Hugo Kuhn: ›Erec‹. In: Hartmann von Aue. Hrsg. von Hugo Kuhn/Christoph Cormeau. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1973 [Erstveröffentlichung 1948] (Wege der Forschung 359), S. 17–48. この概念の訳語は平尾浩三: 作品解題『エーレク』(ハルトマン・フォン・アウエ『ハルトマン作品集』平尾浩三・中島悠爾・相良守峯・リンケ珠子(訳)東京: 郁文堂 1982年、422–430頁)、425頁による。なおこの原理は他の文芸ジャンルでも観察されるが、考察は稿を改める。

¹⁵ フォルカー・メルテンスは、『エーレク』における対応と反復を基調とする構成原理を過大評価すると、ハルトマンの独自性が見えなくなると注意を喚起している。Hartmann von Aue: Erec. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Hrsg., übersetzt und kommentiert von Volker Mertens. Stuttgart: Reclam 2008 (RUB 18530), S. 719.

¹⁶ レナーテ・アーヘンバハの研究により、諸写本の研究が大きく進捗した。Renate Achenbach: Handschriften und ihre Texte. Dietrichs Flucht und Raben- schlacht im Spannungsfeld von Überlieferung und Textkritik. Frankfurt am Main: Lang 2004 (Bayreuther Beiträge zur Literaturwissenschaft 26), S. 17–157; Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik (註 3), S. 77–85. 写本P (9441行) はA (10132行) と比べて行数が少ない。なお断片写本2点の記述は割愛する。なおハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』写本H15は、1398年9月20日に書き終えたと言及されている。Vgl. Spielberger (註 18), S. 165.

4. 写本 A (1504 年から 1516 年にかけての漸進的成立)

成立が早い写本 R と W は、どちらもこの系譜をわずか 200 行ほどに切り詰めた形で記載している。しかも始祖ディートヴァルトからではなく（本来 4 代目の）ヴォルフディートリヒから始めている。オットニートとヴォルフディートリヒの物語はそもそもそれぞれ独立した物語として存在していたと考えられるが、現存テキストは多くの場合、写本や印刷本に連続する形で掲載されている。これに対して写本 P と A では、3 代目のオットニートは略奪婚で異教徒の娘と結婚するが、これを恨んだ父王の放った竜に飲み込まれて命を落とす。寡婦となったリーブガルトは、夫の仕返しをしてくれた勇士と再婚すると宣言し、それを果たしたヴォルフディートリヒが新しい王になるという展開である。前後の事情が複雑だが、新しい方の写本 P と A の系譜が本来の古態を残しているのに対して、古い方の写本 R と W の系譜は、作品成立の直後にこの原態を改作したものに依拠したのであろう。この改作者は、血統の一貫性を重んじたためにオットニート以前の記述を削除したと解される¹⁷。

一方ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の 2 写本は、短いながらもすべての王の系譜をまとめている。したがってハインリヒは『ディートリヒの敗走』の写本 R や W ではなく、原態に近い写本（すなわち P と A の祖本）に依拠したことが確認できる。

さてドイツ語による最初の韻文年代記である『皇帝年代記』が 1150 年頃に成立したのに対して、ハインリヒの『世界年代記』（1370–80 年頃）はドイツ語で書かれた最後の韻文年代記である¹⁸。作者について書かれた記録文書は見つかっていないため、現時点ではこの人物について何もわからない。しかし彼が作品の典拠として多種多様な文書を用いたことはすでに明らかにされている。具体的にはまず『聖書』であるが、その他にも『皇帝年代記』

¹⁷ Lienert: *Mittelhochdeutsche Heldenepik* (註 4), S. 103.

¹⁸ Norbert H. Ott: Artikel 'Heinrich von München'. In: *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Bd. 3. 2., völlig neu bearbeitete Auflage.* Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1981, Sp. 827–837; Gisela Kornrumpf: *Heldenepik und Historie im 14. Jahrhundert.* Dietrich und Etzel in der *Weltchronik Heinrichs von München.* In: *Geschichtsbewußtsein in der deutschen Literatur des Mittelalters.* Tübinger Colloquium 1983. Hrsg. von Christoph Gerhardt/Nigel F. Palmer/Burghart Wachinger. Tübingen: Niemeyer 1985, S. 88–109; dies.: *Die 'Weltchronik' Heinrichs von München. Zu Überlieferung und Wirkung.* In: *Festschrift für Ingo Reiffenstein zum 60. Geburtstag.* Hrsg. von Peter K. Stein/Andreas Weiss/Gerold Hayer. Göppingen: Kümmerle 1988 (GAG 478), S. 493–509; Thomas Cramer: *Geschichte der deutschen Literatur im späten Mittelalter.* München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1990 (dtv 4553), S. 139f.; Andrea Spielberger: *Die Überlieferung der 'Weltchronik' Heinrichs von München.* In: *Studien zur 'Weltchronik' Heinrichs von München.* Bd. 1. *Überlieferung, Forschungsbericht, Untersuchung, Texte.* Hrsg. von Horst Brunner. Redaktion: Dorothea Klein. Wiesbaden: Reichert 1998 (*Wissensliteratur im Mittelalter* 29), S. 113–198; *Die Weltchronik Heinrichs von München.* Neue Ee. Hrsg. von Frank Shaw/Johannes Fournier/Kurt Gärtner. Berlin: Akademie 2008 (*Deutsche Texte des Mittelalters* 88). なお小稿での写本表記 (H15 等) は Shaw/Fournier/Gärtner 版に従う。

や『ザクセン世界年代記』（ドイツ語で書かれた最初の散文年代記）、ルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』といった史書だけでなく、古典物語、フランスの武勲詩、聖書に基づく物語、そしてヴォルフラムらの宮廷物語など多数にのぼる。

その『世界年代記』の2つの写本 H8 と H15 で、すでに述べたようにディートリヒ・フォン・ベルンの祖先の系譜が記されている。H15 はヤーコブ・グリム (Jacob Grimm) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm) が編纂した『古代ドイツ作品集』 (Altdeutsche Wälder) でそのテキストを読むことができる¹⁹。ディートリヒ自身も含めた系譜はそのうち 67 行目から 348 行目までである。そこでこの部分を以下に概観する。なお前章で考察した『ディートリヒの敗走』と対応させるため、ここでも通し番号を付する。同じ内容の段落には同じ番号を与え、記述が対応しない部分は*印で示す。また表現が『ディートリヒの敗走』に対応する場合はそれを明示する。さらに『世界年代記』の語り手の特徴として重要と判断される場合も、原文とともにこれを引用する。なお人名等は原表現を再現することを原則とする。(したがって、ディートレイヒ Dietreich をディートリヒとはしない。)

* 1-66 行 (66 行)

まずハンガリーにフン人が来た次第が語られる。その最後では強大な権力と財力をもつエツェル (Etzel) 王が登場する。著者は、その次第を「聞いたまま、そして読んだままをお伝えする」(4-5 行: *daz sag ich, alz ich es han vernomen, / vnd alz ich ez gelesen han.*) こと、そしてこの「年代記」(choranik) が真実を告げると強調する (65-66 行)。

1. 初代の王ディートヴァル Dietwar (67-116 行 : 計 50 行)

系譜の始まりである。メラニア²⁰の王ディートヴァル (Dietwar、『ディートリヒの敗走』

¹⁹ Altdeutsche Wälder, hrsg. durch die Brüder Grimm. 2. Band. Frankfurt: Körner 1815, S. 115-133. ディートリヒ叙事詩の諸作品が校訂版で刊行されるよりはるか以前の 1815 年に出版されていたにもかかわらず、このテキストが研究史で大きな注目を集めてこなかった理由はいくつかある。1. ディートリヒ叙事詩への関心は『ニーベルンゲンの歌』の素材史の枠に長くとどまっていたこと、2. このテキストは写本 H15 からの抜粋で他の部分が公刊されていないため、写本全体の中の位置づけが把握しにくいこと、3. 『世界年代記』は各写本間の変異差がきわめて大きいことなどである。なお註 29 も参照されたい。

²⁰ 原表現 Meran。上にみたように、『ディートリヒの敗走』ではディートヴァルトがローマの王と位置づけられている。またこの作品でのメラニアは、二代目ズイクヘアの家臣ズィゲバントの領地として言及される (1969 行)。イタリアのトレンティーノ＝アルト・アディジェ州 (南チロル) にあるメラノではなく、現在クロアチアのイストラ海岸地方にほぼ相当する (註 4 校訂版 321 頁)。ハインリヒの『世界年代記』の Meran は『皇帝年代記』の記述に由来するのだろう。Vgl. Die Kaiserchronik eines Regensburger Geistlichen. Hrsg. von Edward Schröder. München: Monumenta Germaniae Historica 1984 [Erstausgabe 1892] (MGH Deutsche Chroniken I, 1.); Die Kaiserchronik. Eine Auswahl. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Übersetzt, kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Mathias Herweg. Stuttgart: Reclam 2014 (RUB 19270), V. 13840. 『皇帝年代記』の日本における先行研究としては平尾浩三「Kaiserchronik に

ではディートヴァルト Dietwart) は気高く心胆の強い人物で、徳操も兼ね備えており人々は賞賛を惜しまなかった。語り手は「私たちが真実の語りを聞いたところでは、王は清く輝かしい日々を送り、非の打ちどころなど一点もなかった。」(81-83 行: er lebt in reinen bluenden tagen, / alz wir die warhait hoern sagen, / vud so gar an allew schand;) と述べる(→『ディートリヒの敗走』25-27 行)。王は平和裡に国を治め、30 歳でヴェスターラント(Westerlant)の王ラディノレス(Ladinores)の娘ミン(ネ)(Minn[e])姫を娶った。豪華な結婚式を挙げ、たくさんの子宝にも恵まれる。しかし語り手はそのうち1人の名前、すなわちズイクヘア(Sigher)だけ名を挙げる。父王が天命で亡くなると、ズイクヘアは多くの国々を攻め取る。

2. 2代目ズイクヘア Sigher (117-164 行 : 48 行)

民と財、そして領土を相続したズイクヘアはさらにランバルト(ロンバルディア)を征服し、立派な統治者となった。語り手は「では手短にお話して彼に妻を娶らせましょう。」(130-131 行: nu lazz wir jn nemen ein weib / mit einem churtzen maer.)と述べ(→『ディートリヒの敗走』1940-41 行)、ズイクヘアはノルマンディ王パルス(Pallus)の娘アメルガルト(Amelgart)を娶る。これは周囲の勧めだった。やがて息子オルトネイト(Ortneit、『ディートリヒの敗走』ではオットニート Ottnit)と娘ズイクリント(Siglint)を得る。この娘はやがてゼイフリート(Seifried、『ニーベルンゲンの歌』のジーフリート Sivrit)の母となる。語り手は、ゼイフリートがハゲンに刺殺されたためのちに大殺戮が起きたとし、「私はこの方の死が今なおとても心に痛む」(164 行: vil ser rewet er noch mich.)と述べる(→『ディートリヒの敗走』2057 行)。

3. 3代目オルトネイト Ortneit (165-214 行 : 50 行)

系譜の話からそれたため語り手は、ここでも『ディートリヒの敗走』と同じく「この話は止め、再び本題を始めましょう」(165-166 行: Nu lazzen wir die red stan / vnd heben hie wider an;)とことわりを入れる(→『ディートリヒの敗走』2058-59 行)。「本の語るところによると」(168 行: alz im daz puoch het gezalt,)オルトネイト(『ディートリヒの敗走』ではオットニート Ottnit)は旅に出て異教徒の王ゴルディアン(Gordian)から娘リーブガルト(Liebgart)を奪い取り、妃とする。子は生まれなかった。ゴルディアンは仕返しのため4頭の竜を送り、ランバルトの国土を荒廃させる。オルトネイトは立ち向かうが寝込みを竜に襲われ命を落とす。妃は嘆き、竜を討った男を夫に迎えると宣言する。

関して(一)一解説と試訳一『中央大学文学部紀要』46号1967年137-157頁および同「Kaiserchronik に関して(二)一Crescentia 試訳一『中央大学文学部紀要』54号1969年1-10頁がある。

4. 4代目ヴォルフディートレイヒ **Wolfdietreich** (215–242行：28行)

ランパルト国が王を失ってまもなく、ギリシャのヴォルフディートレイヒが現れる。これも非の打ちどころのない人物で、はたして竜を討ち殺し、リーブガルトを娶る。生まれた息子はディートレイヒ (**Dietreich**²¹、『ディートリヒの敗走』ではフークディートリヒ **Hugdietrich**) と名づけられた。ヴォルフディートレイヒは 62 歳で亡くなり、パール (Par : アプリアの都バリ) に葬られた。なお語り手はこの短い記述の中で「本が語るところによると」(232行: *alz wir daz puch hoern sagen,*)、「読んだところによると」(235行: *alz ich ez gelesen han,*)、「私たちに真実の書が正しき話を語ったところによると」(241–242行: *alz vns die geschrift der warhait / die rechten maer hat gesait.*) と、典拠が文書であることを 3 度述べる。

5. 5代目ディートレイヒ **Dietreich** (243–264行：22行)

ディートレイヒ (『ディートリヒの敗走』ではフークディートリヒ **Hugdietrich**) も平和に治め、成人するとフランクの国からズイクミン (**Sigminn**、『ディートリヒの敗走』ではズィゲミンネ **Sigeminne**) 姫を妃に迎えた。この婚姻の成立には大きな苦難があった(255–256行: *vil arbeit er umb si gewan, / e er si ze weib nam.*) (→『ディートリヒの敗走』2364–65行)。生まれた息子はアメルンク (**Amelung**) と名づけられ、ディートレイヒは 60 歳で生を終える。

6. 6代目アメルンク **Amelung** (265–292行：28行)

アメルンクも誠実で徳の優れた君主となり、カールの国 (**Kaerling** フランス) から妃 (名前は記されていない) を迎え、3 人の男児を得た。長男がディートヘア (**Diether**)、次男がエルントレイヒ (**Erntreich**、ディートリヒ叙事詩ではエルムリヒ **Ermrich**)、三男がディートマール (**Dietmar**) と名づけられた。ここでも『ディートリヒの敗走』(2415–19行) と同じく語り手が「神よ、私はこの男 (エルントレイヒ) が一日たりとも生きたことを嘆きます。なぜならおよそ母親から生まれた中でもっとも不誠実な男ですから。この男のせいで数多くの命が失われた」(282–286行: *her got, nu chlag ich, / daz er je einen tag genaz, / wan er der vngetrewest waz / der je von muoter wart geporn, / von jm wart manik man verlorne*;) と主人公の伯父を悪の権化と位置づける (→『ディートリヒの敗走』2415–19行)。

* 293–304行 (12行)

エルントレイヒの不誠実さは、息子フリドレイヒ (**Fridreich**) への悪行で明らかである。「エルントレイヒ王はフリドレイヒという息子を得たが、のちにこの子を野蛮な国に送ったことで、その不誠実さがわかった。さあお聞きあれ、この男は自分の愛すべき子への誠

²¹ このディートリヒも『皇帝年代記』の「老ディートリヒ」(*der alte Dieterich* (註 20), V. 13841) に対応する。

実さを切り捨てた。いろいろな話を見ても、かつてこれほど不誠実な人間が生まれたことはない (...)。」(295–304 行: ez gewan der chuenig Erntreich / einen sun hiez Fridreich, / den er seit versant / hin in ein wildez lant, / daran man sein vntrew sah; / nu seht do er sein trew zerprach / an seinem lieben chint, / an manigem maer ich daz vind, / daz pey cheinen tagen / vntrewer leib ward nie getragen. これは『ディートリヒの敗走』の 2460–69 行とほぼ同じ表記である。) ここでもエルムリヒの冷血さが如実に示されている。

* 305–313 行 (9 行)

アメルンクの長男には 3 人の男児があり、彼らはまとめてハルルンク (Harlung) と呼ばれた。しかし彼らはエルントレイヒに捕らえられてラヴェンナの絞首台で処刑された。ここでも「この不誠実な男について本にはそう書かれています。」(312–313 行: alz ez an seinem puoch stat / von dem vngetrewen man.) と文書が典拠とされている。

7. 7 代目ディートマール Dietmar (314–337 行 : 24 行)

三男ディートマールはバルン (ヴェローナ) に立派な城館を築いた。ディートレイヒ (Dietreich) とディートヘア (Diether) という 2 人の息子があつた。しかし栄誉あるディートマールが亡くなると、2 人は伯父エルントレイヒに追放された。その後不屈の大公ヒルブランド (Hilprant、通常ヒルデブランド Hildebrant) が 2 人を育てた。兄弟はエッツェルの許で暮らした。

* 338–348 行 (11 行)

語り手は系譜を総括し、ふたたび自分の叙述は真実であると記す。「これは年代記が真実として語り、また私が読んだことです。」(341–343 行: alz ir choranik sait, / vns fuer die gantzen warhait, / vnd alz ich ez gelesen han.)

* 349–381 行 : 33 行

ここではさらに、ディートレイヒの祖先の系譜につづいて、皇帝テオドシウスの死と後継者マルティアヌスの即位、エッツェルの侵入による国土の荒廃が短い言葉で語られる。やがてエッツェルの兵も多くが討たれる。それはヴォルムスでハゲンに殺されたゼイフリートの死に起因する。再婚しなかったクリームヒルトは前妃ヘルヒエを失ったエッツェルの後妻となり、勇者も臆病者もみな討たれるという事態を引き起こした。最後は自身もヒルブランドによって命を失った。

* 382–404 行 : 23 行

その後「私が読んだところでは」(382 行: alz ich laz,)、エッツェル王はローマの皇帝に使者を送り、自分の妹を娶らなければ汝の命を奪い国も亡ぼすと脅す。しかし神罰が下る。

ある日酔ったエツツェルは鼻からの出血が喉に流れ、寝台で窒息死する。神に奉仕する者を神は救う、と結ばれる。

* 405–415 行 : 11 行

その後フン人は亡くなった主君を見つけておおいに悲しんだ。そして金と銀で頑丈な棺を作り、中に王を横たえて湖の中に沈めた。エツツェル王がどこへ行ったのかは、この世の果てに至るまで今もって誰にもわからない²²。

* 416–422 行 : 7 行

エツツェル王が亡くなり、ハンガリーでその親族もすべて討たれると、ディートレイヒはコンスタンティノープルの皇帝ゼノンの許に移り、その下で過ごした。

* 423–448 行 : 26 行

多くの悪魔がやってきて、ディートレイヒ殿を連れ去り、火山（火の神ヴルカヌスの山）の中へと引き入れた。「文書の伝えるところによると」（427 行: *nach der geschrift sag*）、殿は最後の審判の日までその中で焼かれ続けなければならない。ディートレイヒが名誉と権力を得た時点で、「私が読んだところでは」（432 行: *alz ich e von jm laz*）、彼はゼノンと 17 年過ごしていた。「私はそう読みました」（434 行: *alz ich von jm han gelesen*）。「この勇士についてはますます多くの作り話が語られています。私はそれらが煩わしくてなりません。この人物のことを読みたい人はヒストリア・カトリクムを読むがよい。そこには彼について今に至るまで変わらぬ真実が書かれています。」（440–448 行: *von demselben weigant / wirt manik gelogenz mer gesait, / dez mich vil oft hat betrait / von im manigew zil; / wer ditz von im lesen wil, / der lez historia katolicum, / da vint er an ein drum / die warhait von im geschriben, / alz si bisher ist beliben.*)²³

²² 382–404 行および 405–415 行の記述に近いものとして『ザクセン世界年代記』（1260–75 年頃）がある。Vgl. *Sächsische Weltchronik*. Hrsg. von Ludwig Weiland. In: *Deutsche Chroniken und andere Geschichtsschreiber des Mittelalters*. Hrsg. von der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde. 2. Band. München: Monumenta Germaniae Historica 2001 [Erstausgabe 1877] (MGH Deutsche Chroniken 2). S. 65–384, hier S. 133.

²³ 416–422 行と 423–448 行の記述は『皇帝年代記』（註 20）13915–13932 行、14164–14175 行に対応する。423–448 行は『ザクセン世界年代記』（註 22）134–135 頁にも同様の短い表現がある。なお『皇帝年代記』の対応箇所には『ヒストリア・カトリクム』なる書物はない。コルンルンプフは『ザクセン世界年代記』（註 22、S. 135）に見られる『ゴート人の歴史』（*Hystoria Gothorum*）との類似性を指摘しており（*Kornrumpf: Heldenepik und Historie im 14. Jahrhundert*（註 18）、S. 96）、ハインリヒはこの表現から着想を得た可能性がある。古典古代以来、実在しない文書を典拠として挙げる行為は頻繁に行われているからである。

以上の記述から、次の事実が確認できる。

第1に、『ディートリヒの敗走』における系譜と比べると、ほぼ同一の文や文章が多数存在する。両者が共通の文書を典拠としたことは、可能性としては排除できないが、裏付ける証拠がない。そのため、どちらか一方が他方に依拠したと考えるべきである。

では『ディートリヒの敗走』とハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』を比べた場合、どちらがどちらを引用したのだろうか。作品自体の成立年代では上述のように、『ディートリヒの敗走』の方が『世界年代記』よりも150年以上古いが、「系譜」の記載がある写本では『世界年代記』が先行する。そこで両作品の展開を比較すると、『世界年代記』の記述には受容者に対する配慮が不十分なし欠如していると思われるものが目につく。それはすなわち「エレントレイヒはその息子をのちに野蛮な国へ送った」(上記295–304行)という記述である。『世界年代記』ではディートリヒ・フォン・ベルンの系譜が記述されるだけであり、『ディートリヒの敗走』でこれに続く物語の部分(2522行以降)に対応する記述は当然ながら存在しない。したがって、エレントレイヒが息子を危険に晒したという記述の意図が何ら示されないのである。ハインリヒ・フォン・ミュンヘン(ないし写本H15の筆者)の記述は、やはり『ディートリヒの敗走』の系譜を典拠としたと考えるべきである。受容者が理解できるかどうかについては十分な配慮をしないまま、まとまった文章をそのまま引用したにちがいない。それゆえにこうした脈絡の齟齬が生じたのである。まさにこのような構成ゆえに、『世界年代記』がしばしば他人の作品の「寄せ集め」(Kompilation)と形容されるのであろう²⁴。ただし、『ディートリヒの敗走』で「ヴィルツ人の国」(2463行: der Wilzen lande)と記されている部分を「野蛮な国」(298行: ein wildez lant)と書き換えた点は、受容者の理解を助けるための一般化と解することが可能である。ハインリヒや改作者たちが執筆した時点ですでに存在していない民族の名称とそれがかつてもっていた特定のニュアンスは、当時の人々にとりもはや理解が困難だったかもしれないからである。ここでの考察は、結果として通説を裏づける以上のものではない。しかし両作品とその写本の時間的前後関係については、具体的な判断材料を示すことができた²⁵と考える。

第2にハインリヒの記述は、あとになるほど『ディートリヒの敗走』の表現との一致が目立つようになる²⁶。すでに述べたように『ディートリヒの敗走』でも系譜の構成と記述が進むにつれて単純化する印象がぬぐえないが、ハインリヒの作業にも似た傾向が読み取れる。ディートリヒの祖先の叙述は、ディートヴァルからオルトネイトまでの3代についてはそれぞれほぼ50行で書かれているのに対し、その後ヴォルフディートレイヒからディー

²⁴ たとえば Ott (註 18), Sp. 827.

²⁵ Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Alpharts Tod, Dietrichs Flucht, Rabenschlacht. Hrsg. von Ernst Martin. Berlin: Weidmann 1866. Nachdruck Hildesheim: Weidmann 2004, S. LXIX にも両作品の一致点に関する詳しい報告がある。ただし校訂者のエルンスト・マルティンは多くの箇所です写本の表現を独自の判断により改変しているため、校合には注意が必要である。

²⁶ Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik (註 3), S. 89.

トレイヒ、アメルンク、ディートマルの4代はそれぞれ28行、22行、28行、24行でまとめられている。初代のディートヴァルトの記述だけが突出して長い『ディートリヒの敗走』の写本PとAとは異なるものの、『世界年代記』(H15)も「系譜」の記述では後半を短くするという仕方で差をつけている。これらより成立が早く、かつディートヴァルトからオットニートまで3代の記述を完全に削除し、残りもわずかに200行ほどに縮めた『ディートリヒの敗走』の写本RとWの改訂者(より正確にはそれらの共通祖本の改訂者)とは明らかに異なる姿勢である。しかも『ディートリヒの敗走』では5代目として登場するフークディートリヒが、ここでは『皇帝年代記』に由来するであろうディートリヒに変えられている。したがってハインリヒ(ないしその改作者)は、典拠に無批判に従ったのではなく、他の史料や伝承と比較し、なおかつ行数を勘案しながら構成したと考えられる。

第3にさらなる類似点として、これもすでに指摘したように、語り手が先を急いでいることをうかがわせる表現が目につく(上記の130–131行、165–166行)。これらは『ディートリヒの敗走』で例示したもの(1040–41行、2058–59行)とほぼ同じ文であり、『ディートリヒの敗走』に由来するのはまちがいないだろう。ただし、このように先を急ぐ表現は様々な変異形があるものの、古典古代以来きわめて頻繁に用いられていることにも留意する必要がある。考察の対象を少し広げるだけで数多くの類例を集めることができるからである²⁷。

²⁷ たとえばヨルダネスの『ゲティカ』(6世紀前半)274節と284節で定型化した表現が見出せる。quid plurimum? / quid multum? 「これ以上何を語る必要があろうか。」Vgl. Iordanis: De Origine actibusque Getarum. In: Iordanis: Romana et Getica. Hrsg. von Theodor Mommsen. München: Monumenta Germaniae Historica 1982 [Erstausgabe 1882] (MGH Auctores antiquissimi V, 1). S. 53–138, hier S. 129, 131. この表現は、小稿第2章で『ディートリヒの敗走』から挙げた「さてこれ以上何をお話しましょうか」(1938行)および「この話をこれ以上して何になるでしょう」(2129行)に対応する。また12世紀のオットー・フォン・フライズィングとラヘヴィンによる『フリードリヒ事績録』で以下の記述が見出せる。Taceo marchiones, comites clarissimos et valde potentes, quorum nomina si coner perstringere, delicato seu pigro lectori onerosus existam. 「きわめて名高くとても権勢ある辺境伯や伯爵もいらっしやいますが私はふれずにおきます。もしその方たちのお名前を手短にでも話そうとしたら、甘やかされ不機嫌な読者には、私は重荷になるだけですから。」Vgl. Otto Bischof von Freising und Rahewin: Gesta Frederici seu rectius Cronica. Übersetzt von Adolf Schmidt. Hrsg. von Franz-Josef Schmale. Mit einem Beitrag von Fabian Schwarzbauer. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 4. Auflage 2000 (Ausgewählte Quellen zur Geschichte des deutschen Mittelalters 17), S. 454. この姿勢も、同じく第2章で見た「これを人々に語ると長い話になってしまいます。私たちは他の者たちは伏せて二人の使者だけ名前を挙げましょう。」(1963–66行)と軌を一にする。ドイツ語で書かれたものとしては『皇帝年代記』に以下の表現がある。Nû lâzen wir die rede stân. 「さてこの話はやめましょう。」(註20, V. 13839.) 物語文芸の典型的な例としてはヘルホルト・フォン・フリッツラルの『トロイアの歌』(1200年頃か)がある。そこでは語り手が「そこで私は(原典を)意識して長引かせません」(97行: So lenge ich ez mit willē niht)、「そこで話を切り詰めましょう」(4080行: Daz ich die rede kvrze)、「手短に語ることをお望みであれば」(756–757行: Wil man daz ich spreche / Mit kvrtzlichē wortē)、「(私の話は)当

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の写本 H15 および H8 の他の部分（すなわち「系譜」以外）で、これらの先を急ぐ記述がどのように分布しているか（あるいはしていないのか）を確認することができれば、作者（ないし改訂者）自身の姿勢と『ディートリヒの敗走』との関係を確認することができるだろう。しかし現在、写本 H15 と H8 を含めてこの年代記には、まだ特定の写本に基づきかつ全体を見通せる校訂版が存在しない。すでに述べたように各写本の記述が莫大な分量におよぶことに加え、本文の流動性もきわめて高いからである²⁸。全体を俯瞰した上で個別の事象を考察するという作業は今後の課題となる²⁹。

4. 課題と展望

ここまでは『ディートリヒの敗走』と『世界年代記』の「系譜」に文レベルで共通する表現を中心に考察してきた。最後に両作品のいくつかの特徴に着目した上で、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンがいかなる意識で『ディートリヒの敗走』の「系譜」を取り入れたかに関する推測を述べる。

まず各作品がいかなる方法で真実らしさを担保するかを考察する。どちらも「歴史」をテーマとするからである。ここで注目するのは、書物に書かれている、という形で受容者に語りかける表現である。『ディートリヒの敗走』の系譜部分では以下の例が見られる³⁰。

然短く簡にして要を得たものにしますから」(6693–94 行: *Da sie vō rechte wesē sal / Kvrz enge vnd smal*) のように宣言している。フランス語圏に由来する一連の宮廷物語が翻訳される場合、原典より行数が増えるのが常であるが、ヘルボルトの『トロイアの歌』は唯一、原典を半分強の長さにとまとめた作品である。Herbort's von Fritzlâr liet von Troye. Hrsg. von Ge[org] Karl Frommann. Quedlinburg/Leipzig: Basse 1837 (Nachdruck Amsterdam: Rodopi 1966). Vgl. Franz Josef Worstbrock: Zur Tradition des Troiastoffes und seiner Gestaltung bei Herbort von Fritzlâr. In: Zeitschrift für deutsches Altertum 92 (1963). S. 248–274, hier S. 254. ヘルボルトがなぜ短くしたかは明らかでないが、比較と考察には重要な資料である。

²⁸ 作者のオリジナルに近づくことはたしかに困難で、いわゆる「不確定テキスト」の典型的な例である。Vgl. Heinzle (註 9), S. 61. 寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(2) —J. ブムケによる「不確定テキスト」('der unfeste Text') の概念を中心に—」北海道大学『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』49 (2005)、89–107 頁も参照されたい。

²⁹ なお部分的には校訂版が刊行されている。『新約聖書』以降の歴史を再現するものとしては *Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee* (註 18) がある。編者の功績はたいへん大きいのだが、この版は語りの部分によって依拠する写本が異なる。しかも全体で 18173 行にとまとめられており、『旧約聖書』に対応する部分など省略された語りも多い。エツェルやディートレイヒの活躍に関する記述はあるが (382–406 頁)、その部分の底本は H3 (14 世紀末) で内容が大きく異なり、「系譜」の記述もない。ちなみにここでは語り手が「先を急ぐ」様子は見えない。

³⁰ 「本」(buoch) を語りの典拠とする箇所は校訂版 *Dietrichs Flucht* (註 4), S. 14 に列挙されている。さらに *Rabenschlacht* (註 4), S. 45; *Alpharts Tod* (註 4), S. 19 も参照。ちなみに『ラヴェンナの戦い』と『アルプハルトの死』も含めた歴史叙事詩では、「本」に関連する記述が冒険叙事詩の諸作品と比べてはるかに多い。歴史叙事詩諸作品の作者たちの心の中に、史書としての性格づけをする意識があったのであろう。

als unns das puoch tuot schein, V. 282 (この)本の伝えるところによりますと、
 Der unns das máre zusammen sloss, / der tuot unns an dem buoch kundt, V. 1843f.
 私たちのためこの話をまとめた人は、(この)本でこう告げています、
 Das buech unns kundt hat getan, V. 2025 (この)本が私たちに伝えるところでは、
 als unns das puoch von im las, V. 2273
 私たちに(この)本が王について語ったところでは(類例 V. 1927)
 als wir das puoch hoaren sagen, V. 2311 (この)本が語るのを聞いたところでは、
 (類例 V. 2395)

これらの「本」(buoch)は一般的には典拠としての書物(ただし虚構)を意図すると解されるが、朗読者が手にする写本を意味する可能性も考慮すべきである。その場合を想定して訳文は「(この)本」とした³¹。

さてこのように「書かれたもの」に依拠する例は、『世界年代記』でもすでに 235 行などで見たとように、さまざまなパターンがある。

vnd alz ich ez gelesen han. V. 5 そして私が読んだままに(お伝えします)
 von dem ich an der choranic laz, V. 58
 (エツェル王について)私は(この)年代記で読みました(…)
 alz wir daz puch hoern sagen, V. 232 私たちが(この)本の語りを聞いたところ
 では、

『ディートリヒの敗走』と同じような表現に見えるが、最初の例には「読む」(lesen)という動詞が用いられている。『世界年代記』であれば、語り手の行動としてこの動詞の用例が多数あるのは自然であろう。史書である以上、さまざまな文書が出典として引用されるのは当然だからである。

これに対して『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』および『アルプハルトの死』を包括する歴史叙事詩では、「本」(buoch)が何度も用いられているにもかかわらず、語り手を主語とする lesen という動詞はほとんど用いられていない。『ディートリヒの敗走』に見られる唯一の例は以下の通りである。

als ich fur war han vernomen / und an den buochen gelesen. V. 6331f.
 私が真実として聞き、また諸々の本で読んだところでは。

『ラヴェンナの戦い』にはこうした例がない。『アルプハルトの死』でも同種の表現は確認できないが、伝達者の識字力を前提とする記述はある。

wye ys an dem buch hye stet geschreben, V. 217 (この)本に書かれていますように、この違いは何に由来するだろうか。常識的には、『世界年代記』が(ひとまず)純粋な史書

³¹ Vgl. Dietrichs Flucht (註 4), S. 85. エリーザベト・リーナート氏 (Frau Prof. Dr. Elisabeth Lienert) からは、典拠としての「本」と朗読者が手にする「本」のどちらを意味するかは個別に検討しなければならないというご教示をいただいた。厚く御礼を申し上げます。しかしここで挙げた諸例はどれも、明白にどちらかであると判断することが困難である。

であり作者の識字力が当然の前提とされる一方、『ディートリヒの敗走』をはじめとする歴史叙事詩は口承文芸の文体を援用したために、作者にはまちがいなく識字力があつたにもかかわらず、「読む」という動詞をあえて避けた、と解釈すべきなのだろう。しかしそれでは、語りの典拠として「本」が多用されたことへの説明ができない。中世当時は「本」と聞いて人が最初に連想するのは『聖書』だったように、語り手が「本が語るところによると」といえば、それは聖書かそれに匹敵する書物の権威に依拠することを意味したのである。上記で「本が語った」という例をいくつか見たが、それは「読んだ」と等価だったはずである。朗読者が「手にした本」を意味した場合がいくつかあつたかもしれないが、それがすべてだったとはとうてい思われぬ。これが『ニーベルンゲンの歌』であれば、典拠としての「本」も語り手が「読む」行為も（15世紀末の写本kに至るまで）まず現れない。『ディートリヒの敗走』の場合は、口承文化と文字文化の接点で成立したがゆえに生じた矛盾を消化しきれなかったのかもしれない。

「本」という表現がありながら「読む」という行為が（ほとんど）記述されないことを矛盾と感ずるのは、現代人の思い上がりの可能性もある。1200年頃に成立した『ニーベルンゲンの歌』より約100年あとに書かれたこの作品では、すでに浸透し始めていた文字文化の影響を消し去ることが困難であり、またその必要が感じられていなかったのかもしれない。少なくともその可能性は考慮すべきであろう。ハインリヒの『世界年代記』では、語り手が「読んだ」ことを強調することに何の問題もなかったのに対し、『ディートリヒの敗走』の作者は、書物の権威に依拠する一方で、語り手が「読む」という記述を慎重に避けていたと考えられる。

一方『世界年代記』における系譜の記述内容を見ると、描かれた人物の寿命はもはや「創世記」的ではなくなっている。年齢の記載があるのは上記4のヴォルフディートレイヒ（62歳）と5のディートレイヒ（60歳）だけだが、ハインリヒが依拠した『ディートリヒの敗走』ではヴォルフディートリヒが503歳、フークディートリヒが450歳であり、その差は歴然としている。もしこの違いがハインリヒ自身に由来するのであれば、彼は自分で造形する人物にもはや聖書的な権威を与えようとはせず、読者にとってより現実的な、あるいは身近に感じられる系譜を提示することを意図したと考えられる³²。

小稿は『ディートリヒの敗走』とハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』について、文献学的に証明できることおよび一定程度の推測が可能なことを基にして、ここまで筆者の推論を述べてきた。そこで最後に、『世界年代記』の作者が『ディートリヒの敗走』からその主人公の「系譜」を取り入れた前提と理由を考えたい。まず、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンとその改作者たちには強力な支援者がいたと思われる。上述のように、断片写本を除く完本のテキストがいずれも56000行から100000行という莫大な分量を有している。この事実だけを見ても、作品とその写本を成立させるための財力と権力を有する人々の強い後押しがあつたことはまちがいない。これらの写本では多くの場合、受容者

³² Kornrumpf: Heldenepik und Historie im 14. Jahrhundert (註18), S. 103.

の視覚に与える工夫が盛り込まれている。各章の最初の文の頭文字に複数のインクを用いて大書したり、小見出しのインクの色を変えるとといった彩色が典型的な例である。しかも19の完本のうち半数を超える11点で挿絵が施されており、その数は200を超えるものが7点、100から200の間が3点である³³。当時は識字力を持たない人の方が圧倒的に多かったので、図像によって内容理解を促し、また記述の説得力を強める意義はむしろ大きかった。しかし単なる朗読のための写本と大きく異なるこの傾向は、『世界年代記』が原著の段階から有していた一種の贅沢品としての性格を示唆する。膨大な数の豪華な挿絵により、写本所有者の財力と威信を示すことができたのである³⁴。

ドイツ語で書かれた年代記の代表的存在である『皇帝年代記』(17283行)やルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』(36338行)はともに完本が存在せず、それぞれの校訂版は中斷形態で刊行されているが、ハインリヒの『世界年代記』各写本の記述量はそれらをはるかに凌駕している。中世では史書のベストセラーともいえる『皇帝年代記』を上まわる量の新しい年代記を望む人が複数存在したことになる。これらの人物なくしては、ハインリヒの著作が広まりを見ることはあり得なかった。ではその『世界年代記』の中でディートリヒ・フォン・ベルンの祖先の系譜はどのような価値を持っていたのだろうか。その原因として考えられることはいくつかある。

第1に、作者(および改作者)は正当な歴史記述(たとえば『聖書』の再話)の合間に(前章で挙げた)さまざまな史書や文芸作品の記述を取り込んだ。これにより制作の依頼主や周囲の人々を単に退屈させないだけでなく、娯楽としても十分に楽しませることが目的だった³⁵。

³³ Spielberg (註18), S. 118–180.

³⁴ 挿絵 220 を有する写本 H2 の図像部分は刊行されている。Claudia Brinker-von der Heide/Jürgen Wolf (Hrsg.): Die Arolser Weltchronik. Ein monumentales Geschichtswerk des Mittelalters. Mit Beiträgen von Kurt Gärtner/Palf Pälser/Martina Sitt. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2014.

³⁵ 中世の史書では、登場人物の激しい戦いぶりをディートリヒになぞらえることが珍しくない。ゴットフリート・ハーゲンの『ケルン市韻文年代記』(1271年)では als Dederich van Berne fy ftreden. (4757行)「ディートリヒ・フォン・ベルンのように彼らは戦った。」という記述がある (Gottfried Hagen: Reimchronik der Stadt Köln. Hrsg. von Kurt Gärtner/Andrea Rapp/Désirée Welter unter Mitarbeit von Manfred Groten. Historischer Kommentar von Thomas Bohn. Düsseldorf: Droste 2008 (Publikationen der Gesellschaft für rheinische Gesschichtskunde 74. Vgl. auch V. 3685, 5007, 5689)。また文芸色が強まるもののヤンス・エニーケルの『君公の書』(13世紀末)でも、実在した人物の戦いについて wir haben vil dicke vernomen, / wie der Berner wær komen, / dō er hern Ekken vant / und wie er in sluoc zehant: daz vehten was gar enwiht / wider dise geschit, wie die zwēn wīgant / vāhten dā umb Ōsterlant. (3609–16行)「私たちは、ベルン殿がエッケ殿の許へやってきてたちまち討ったという話をほんとうによく聞きました。しかしそれですら、オーストリアをめぐるこの二人の勇士(ハインリヒ・プロイセルと孤児カードルト)の激戦に比べるとたいしたことはありません。」(Jansen Enikels Fürstenbuch. In: Jansen Enikels Werke. Hrsg. von Philipp Strauch. München: Monumenta Germaniae Historica 1980 [Erstausgabe 1900] (MGH Deutsche

第2に、彼らには強い素材収集欲があった。口承文芸の英雄ディートリヒ・フォン・ベルンの祖先の系譜という斬新なテーマは、そうした素材収集の過程で取り入れられた。それはオーソドクスな教会の教えには反するが、世俗貴族にとり、ディートリヒの祖型テオドリクスが異端のアリウス派だったことは関心の対象とはならなかったにちがいない。

第3に、『ディートリヒの敗走』の「系譜」の記述は、すでに見たように（真偽は別として）それ自体史書として構成されており、文体面でも史書の伝統にかなう部分があった。『世界年代記』の制作依頼者を中心とする成立圏においても十分に歴史的とみなしうる素材であり、それゆえに取り入れることが可能だった。

以上が現段階での作業仮説である。これを今後の考察の出発点としたい。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 15K02399 の助成を受けたものである。

Chroniken 3)) と記す。受容者にはわかりやすい譬えだったにちがいない。ハインリヒが文芸作品の記述を取り入れたのは、こうしたエピソードの挿入と同じ方向性を持ち、なおかつはるかに規模を大きくしたといえる。

«Zusammenfassung»

›Dietrichs Flucht‹ und die ›Weltchronik‹ Heinrichs von München
— Überlegungen zu Dietrichs Genealogie —

TERADA Tatsuo

Es ist bekannt, dass die Ende des 14. Jahrhunderts entstandenen zwei Handschriften (H8) und (H15) der ›Weltchronik‹ Heinrichs von München (um 1370/80) ein Exzerpt der einleitenden Genealogie von ›Dietrichs Flucht‹ (4. Viertel des 13. Jahrhunderts) enthalten. In der Forschung stieß der Text, den Brüder Grimm bereits 1815 herausgegeben hatten, allerdings auf kein großes Interesse.

Bei näherem Zusehen stellt sich eine mögliche durchdachte (Re-)Konstituierung des Autors heraus: Die Darstellungen von Dietwar, Sigher und Ortneit, den ersten drei Ahnen Dietrichs von Bern, umfassen jeweils ca. 50 Verse, während den folgenden vier Königen Wolfdietreich, Dietreich, Amelung und Dietmar jeweils 28, 22, 28 und 24 Verse gewidmet werden. Während Dietrichs Ahnherren (außer Ottnit) bei ›Dietrichs Flucht‹ alle ein genesishaft-hohes Alter – 340 bis 503 Jahre – haben, wird in Heinrichs ›Weltchronik‹ nur angegeben, dass Wolfdietreich 62 Jahre und sein Sohn Dietreich 60 Jahre überleben. Das erscheint alles eher beabsichtigt als zufällig. Hier wird zudem Hugdietrich, die fünfte Generation von Dietrichs Vorfahren bei ›Dietrichs Flucht‹, durch Dietreich ersetzt, der wahrscheinlich aus der ›Kaiserchronik‹ stammt. Für die Gestaltung von Dietrichs Genealogie bei Heinrichs ›Weltchronik‹ sind des Weiteren die ›Sächsische Weltchronik‹ und weitere Quellen zu berücksichtigen.

Es ist daher anzunehmen, dass Heinrich – oder der bzw. die Bearbeiter der (gemeinsamen Vorlage der) Hss. (H8) und (H15) – die Hauptquelle mit anderen Quellen verglichen und diese ‘Genealogie’ sorgfältig und im Hinblick auf die Verszahl der in seinen Augen wichtigen (und weniger relevanten) Erzählabschnitte und auf das realistische Lebensalter konstruiert haben.

Anschrift des Verfassers:

Prof. TERADA Tatsuo

Research Faculty of Media and Communication / Hokkaido University /

Kita-Ku Kita 17 Nishi 8 / 060-0817 Sapporo / Japan

tterada@imc.hokudai.ac.jp